

# 2018心の中に平和

## エッセイ・作文コンクール

愛媛・松山ユネスコ協会主催

元広島原爆資料館長・広島ユネスコ協会副会長の名前を冠した『高橋昭博平和祈念賞』を創設、各賞と合わせ表彰式行う

松山ユネスコ協会主催の『「心の中に平和」エッセイ・作文コンクール』の表彰式が、去る12月24日、松山市内で行われました。この表彰には、元広島原爆資料館長・広島ユネスコ協会副会長の名前を冠した、第1回の「高橋昭博平和祈念賞」の授与も行われました。

「作文コンクール」は、松山ユ協が小学生、中学生、高校生を対象に募集している事業で、今年で14回を迎えます。表彰には入賞、学校賞などの授与があり、今回は新たに被爆証言を通し、国内外に核兵器廃絶・平和を訴え続けた元広島原爆資料館長・広島ユ協副会長・高橋昭博さんの功績を顕彰する形で、「高橋昭博平和祈念賞」が創設され、「原爆に関する平和作文」で、「特に優秀な作文」を表彰することになりました。

2018年は147編（小学校19編、中学校90編、高校38編）の応募の内、入賞45人、学校賞4校、新設の「高橋昭博平和祈念賞」は、最優秀賞（松山ユネスコ協会長賞）にも選ばれた中村康太さん（松山市立東中学校1年）が、ダブル受賞されました。

創設に努めて来られた松山ユ協青年育成部長の有光慶眞さんは「この賞が修学旅行の平和学習につながるきっかけとなることを願っています。平和を次の世代に繋いで行きたいと思っています」と、期待の声を寄せておられます。



コンクール入賞者の皆さん

最優秀賞を受賞した中村さんの作文の題名は、「戦争の爪あと」。その中で中村さんは、祖父（母方の父）の体験として、長崎・原爆投下の8月9日、「その日、中学校の級友と学校の帰り、祖父は自転車で友達は路面電車で目的地を目指して、楽しみながら競走していた」。午前11時2分、原爆投下。級友は即死、祖父は助かった。しかし祖父は友や当時の惨状を思い、一生苦しんでいた。心のキズは祖父だけでは済まなかった。

「僕の母は僕が生まれる前に、父方の祖母から僕が母の子供だから被爆が移るんじゃないかといわれた」「戦争は命を消してしまう他に、当事者だけでなく子孫までも心にキズを付けて行くおろかな事しかない」「今はまだ何も役に立つことはできないかも知れないけど、何か平和でいられる方法を、これから考えて行きたいと思う」。中村さんは、祖父の被爆や母の体験を通し、命の尊さや平和への行動を、切々と決意固くつづっています。

松山ユ協「平和祈念賞」創設の連絡や作文に触れて、故・高橋館長夫人・史繪さんは、「夫が亡くなって7年（2011・11・2 逝去）になりますが、以前、夫の被爆証言を聞かれた松山ユ協の方が力を尽くされ、平和への活動や大切さを、祈念賞を新設し語り伝えようとされているご努力に、心から感激しています。広島以外の方が関心を持ち、平和を受け継いでいただけることに、心強い思いがします。夫のささやかな平和活動が報われたような気がしております」と松山ユ協の取り組みに、感謝の気持ちを込めて話されていました。



最優秀賞、平和祈念賞をダブル受賞し、表彰を受ける中村さん

【写真はいずれも松山ユ協提供】